

日本ジェンダー研究

第 18 号

論文

- グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』
ヤーコプとヴィルヘルムの神話論的研究と現在のジェンダー研究
..... 横 道 誠
- 公益勤務要員からみた韓国の軍事主義
..... 佐々木 正 徳
- ベトナムにおけるジェンダーの視点からみる家族制度と労働の形態
..... 香 川 孝 三
- The Gender Representation and Bodily Negotiation in Taiwan's Occupy Congress Movement
..... 李 明 聰

研究ノート

- 「男性（主夫）が気持ちよく家事や育児ができる環境」について
——主夫の状況と意識から——
..... 島 田 直 子・友 野 清 文
- 映画『マジック・マイク』で考える 21 世紀ハリウッド映画の男性表象
..... 國 友 万 裕
- 大学生の性役割の発達
——就職活動経験の違いを反映して——
..... 桂 田 恵美子

書 評

- 富士谷あつ子・伊藤公雄 編著「フランスに学ぶ男女共同の子育てと少子化抑止政策」
(明石書店 2014 年 7 月)
..... 山 本 厚 子
- 望月紀子『ダーチャと日本の強制収容所』（白水社）
..... 伊 藤 公 雄

日本ジェンダー学会

2015

The Folktale Collection of the Brothers Grimm

The Mythological Studies by Jacob and Wilhelm and the Current Gender Studies.

Makoto YOKOMICHI
(Kyoto Prefectural University)

The folktale collection of the Brothers Grimm has been criticized by the viewpoint of the gender studies. Even though these criticisms brought much beneficial opportunity to reconsider the significance of this collection, however they often reveal the lack of the general understanding of the works done by the Brothers Grimm.

In the 1st chapter, the typical opinions about the editing and re-narrating of the folk tales by Wilhelm Grimm are focused on. The well-known critics of the gender studies, Maria Tatar and Ruth B. Bottigheimer, attacked exclusively Wilhelm and claimed that his 'patriarchal' and 'conservative' value is apparent. However, as Gunhild Ginschel revealed, the characteristics of the editing and re-narrating of the folktales by Jacob Grimm is strikingly similar to that of Wilhelm.

In the 2nd chapter, the idea of '*Volk*' (common people, folk) is discussed. Nowadays, the profiles of the contributors of the folktales are rather known: Most of data that are heard of came from females, but the Grimm's collection includes very many written sources from males. For Jacob and Wilhelm Grimm, the concrete contributors were the secondary concerns, because they kept the abstract idea about '*Volk*', which had been keeping the ancient mythological tradition. It is surly possible that we find the lack of the consciousness about the gender in their works, but it is also necessary to comprehend the limitation of the thought style of their epoch.

In the 3rd chapter, the scholarly works of Jacob and Wilhelm are discussed. On the surface, the descriptions of these works are misogynic. However, the both Jacob and Wilhelm Grimm had no intention of disrespecting females. They preceded their investigations based only on their interest about the mythology. For example, the fact that not the males (gods), but the females (goddesses) ruled the fate and the law in the Nordic mythology was enough of an attraction for them. The Brothers Grimm did not share the gender consciousness of our age, but we should be prudent when judging the past people from our own value.

For the last part, I refer to the study of Ingeborg Weber-Kellermann. She criticized the works of the Brothers Grimm and their followers with the appropriate understanding of the history of scholarly activities in Germany and Europe. She also knew an appropriate way to criticize the folktale collection of the Brothers Grimm with her knowledge.

グリム兄弟の『子どもと家庭のメルヒェン集』

ヤーコプとヴィルヘルムの神話論的研究と現在のジェンダー研究

横 道 誠
(京都府立大学)

はじめに

グリム兄弟（兄ヤーコプ、1785－1863、ヴィルヘルム、1786－1859）の『メルヒェン集』¹⁾は、1968年の学生運動、そして同じ頃に起こった第2次フェミニズム運動をきっかけとしてジェンダー研究の観点から厳しい批判に晒され始め、現在にいたっている。『メルヒェン集』は固定的な身分制度を肯定し、男女の伝統的な性役割を助長する文化装置として機能してきたというのである。この論調は1970年代から1980年代にかけて西ドイツから米国へと広がり²⁾、学術的な批判と平行して、現代の欧米の価値観にかなった形でメルヒェンを再話する実践運動とも連動していった³⁾。近年では、伝統的な家父長制とフェミニズム運動の両方から等閑視されがちであったLGBTIQ⁴⁾の存在を重視した研究や再話もあり（いわゆるクィア・スタディーズの観点）、この動向は現在も進行中である⁵⁾。

グリム兄弟に対するジェンダー研究が真剣に取り組むべき論点を多くもたらしたことは疑うべくもない。しかし多くの批判は、ヤーコプとヴィルヘルムの価値観への慎重な理解や学者であった彼らの仕事の全体像を理解せずにおこなわれている。『メルヒェン集』の表面的印象にもとづいた批判（というよりは感情的非難）も散見され、是正されるべき風潮と言えるだろう。本稿はこの反省に立って、『メルヒェン集』のジェンダー研究をおこなう。

1. ヴィルヘルムへの攻撃とヤーコプのメルヒェン様式

『メルヒェン集』の企画はヤーコプの主導によって始まったが、初版成立の時点でヴィルヘルムが主導者になっており、その後の改訂もヴィルヘルムによって進められた⁶⁾。ヴィルヘルムによる改訂作業をジェンダー研究の立場から批判した研究は多数存在するが、代表的なマリア・ターター⁷⁾とルース・ボティックハイマーの論調⁸⁾を確認してみよう。彼女たちの著作は国際的にも広く知られ、邦訳も存在する⁹⁾ため、その影響力は大きいはずである。

ターターによると、ヴィルヘルムは最初の執筆の段階でヤーコプを騙していたのであって、「ヤーコプが知らないうちに、明らかにもう編集を加えていた」¹⁰⁾。彼女はさらに「ヴィルヘルム・グリムは説話を広範に書きなおし、際どい逸話を削除して編集を進めた」のであり、「メルヒェンに衛生処理をほどこして、それらがいかなる文化においても児童文学として受け入れられるものにする過程を切り開いたのは、彼の功績なのだ」と皮肉る¹¹⁾。彼女は、改訂によってヴィルヘルムの偏見が明らかになったと考えている¹²⁾。

ボティックハイマーはターターよりも穏当であり、『メルヒェン集』の価値観がヴィルヘルム個人のもののなのか、背景にあった社会の傾向なのかを判別すべきだと考えている¹³⁾。しかし、ヴィルヘルムを弾劾する姿勢はターターと同じである。ボティックハイマーは糸紡ぎに関するメルヒェンを例に出し、それを提供した女性たちが「貧困と搾取」の実態を語ったのに対して、ヴィルヘルムは「家父長制の保守的な社会」への指向から改竄したと論じる¹⁴⁾。ターターもボティックハイマーも、「3人の糸紡ぎ女」(KHM 14)の版の変遷過程において、ヴィルヘルムが末尾に女性の家事への熱意のなさを戒める文言を追加したことを非難している¹⁵⁾。

ターターとボティックハイマーは、ともに改訂作業をおこなったヴィルヘルムに批判を集中させている。前者はヴィルヘルムの専横を推測し、後者は(ヤーコプが資料提供をおこなったとしても)執筆をヴィルヘルムの責任に帰している¹⁶⁾。ヤーコプとヴィルヘルム両者の個性は多くの点で異なっていたが、ハインツ・レレケは、メルヒェンの改訂の方針に関して両者の間で食い違いがあったとは実証されていないと指摘する¹⁷⁾。米国のジャック・ザイプスもレレケの見解を追認している¹⁸⁾。ヤーコプによるメルヒェンの改訂の方針は、はたしてヴィルヘルムと一致していたのだろうか。

ジェンダー研究でよく問題になるメルヒェンの性的な内容の取り扱いについて考えてみよう。ターターはグリム兄弟の『メルヒェン集』に収められた「ラプンツェル」に言及し、ヒロインの妊娠の描写が改訂によって削除されたことを指摘する。これ自体はよくある指摘だが、彼女はさらにイタリアのジャンバッティスタ・バジレーのメルヒェン集『五日物語』に言及し、「ラプンツェル」の類話である「ペトロシネッラ」(2日目第1話)を参照する。そこではふたりの恋人のベッドシーンが、「パセリを愛のソースで楽しむ饗宴になりました」¹⁹⁾といった表現などによって明けて透けに語られている。ターターの判断では「バジレーのペトロシネッラは、王子とそう変わらない健康的な性欲を示しているように思われる」というものであり、ヴィルヘルムによる「逸話の厳粛な取り扱い」が皮肉られている²⁰⁾。つまり、ヴィルヘルムは女性の「健康的な性欲」に検閲を加えたと思われ、非難しているわけである。彼女は、「バジレーは明らかに異なる読者層を意識して書いていた」²¹⁾とも述べており、バジレーが大人向きに、ヴィルヘルムが子ども向きに書物を編んだことを正確に理解している。それでも、ヴィルヘルムの改訂作業を許すことができないのである。

しかし、この点を批判するならば、ヴィルヘルムだけに批判を集中させるのは不当である。ドイツのグンヒルト・ギンシェルは、かつて『五日物語』に収められた「蛇」(2日目第5話)が、ヤーコプによって「あるメルヒェン」として翻訳され、発表されたことに注目した²²⁾。これは忠実な翻訳ではなく改訂をふくむ再話であり、皮肉な表現を削る、時間の順序を抽象的にする、ありふれた言い回しを追加する、複雑な描写を素朴にするといった作業によって成立したものだ。つまり、ヤーコプはヴィルヘルムが『メルヒェン集』でおこなったのと同じ作業に携わったのだ。エロティックな表現の削除もされており²³⁾、改訂の方針についてヤーコプとヴィルヘルムが不一致だったとは言えないのである。

ドイツでの優れた先行研究の多くが米国や日本では知られていない。英語の世界的影響力や、日本でも本場ドイツのものよりも米国由来の研究が紹介されがちであるのは、さまざまな弊害をもたらしている。『メルヒェン集』を批判する場合は、ヤーコプによる関与の実態への考察も含

めて、総合的な検討をおこなうべきであろう。

とは言うものの、米国のジョン・エリス²⁴⁾のように、ヴィルヘルムとヤーコブをまとめて非難すべきであると主張したいのではない。ターター、ボティックハイマー、エリスを含めて、グリム批判者はしばしば『メルヒェン集』以外のグリム兄弟の仕事を無視する。この点について、以下で見てみよう。

2. 男女、「民」、神話

『メルヒェン集』の成立に大きく貢献したのは、教養程度の低い2人の熟年女性だったというイメージが、かつて広く受容されていた。その2人の女性「老女マリー」と「フィーマンおばさん」は、現在ではともにフランス系移民の教養ある女性であったことが知られている。しかも「老女マリー」は『メルヒェン集』の企画に協力した時点で20歳だった別の女性マリー・ハッセンプフルークの誤解された姿だった²⁵⁾。『メルヒェン集』で直接紹介されたメルヒェンの提供者は「フィーマンおばさん」のみである²⁶⁾。

言うまでもなく、メルヒェンは老若男女に関係なく誰からでも語られる可能性がある²⁷⁾。ヴィルヘルムは「フィーマンおばさん」以外のメルヒェン提供者について語らず、ヤーコブは誰についても語らなかったが、現在では提供者たちの情報が明らかになってきている²⁸⁾。メルヒェンの聞き取りは主に若いフランス系移民の女性を対象としておこなわれた²⁹⁾。これに対して男性からの聞き取りは乏しい³⁰⁾。女性からは主としてメルヒェンが聞き取りによってもたらされ、男性からは主に書き付けた紙によってもたらされたという事実は、男女間の識字についての教育機会の格差を垣間見せている。グリム兄弟は書物（つまり口承でなく書承）からもメルヒェンを収集した³¹⁾。これらの書物³²⁾の執筆者が男性ばかりであることを考えると、男性による寄与は女性によるものを凌ぐかのように見えるかもしれない³³⁾。しかし、メルヒェンの多くは、伝承の過程で男女両性の声や筆を伝ってグリム兄弟に行き着いたはずである。だから、『メルヒェン集』は最終的には男性であるヴィルヘルムによって書物（書承）に形が整えられたものの、それは本質的に歴史の中の男女の語りの集合体である³⁴⁾。グリム兄弟の仕事を批判する場合には、この点がよく踏まえられるべきであろう。ひとつひとつのメルヒェンは無数の男性と女性によって受け継がれてきたのであり、ヴィルヘルムだけでなく、彼らと彼女らが思い思いに「改訂」を加えてきたはずなのである。

さらに、そのようなジェンダーの視点からの問題意識がグリム兄弟の時代に存在しなかったことも忘れてはならない。グリム兄弟の関心事は、無数の男女のひとりひとりではなく、その全体としての「民」（Volk）という抽象的存在であった。ターターやボティックハイマーは顧慮していないが、ヴィルヘルムは、『メルヒェン集』「大きな版」第2版第1巻の序文「メルヒェンの本質について」でメルヒェンが神話から派生したものであると主張している。

神話の本性に疎くない者は、もろもろの民（Völker）のすべてのもとの、神話がきわめて頻繁にメルヒェンとして表現されたことを、また特定の時代のもとの精神によっては、神話がしばしばメルヒェン以外のものとして把握されえなかったことを知っている³⁵⁾。

同じ序文で、ヴィルヘルムは抽象的で集合的な「民」(Volk)が統一体として存在し、その「民」が神話に由来する伝承(メルヒェンを含む)を宿しているというイメージを語っている。

〔…〕全体的なものは民の意識においてのみ揃った形で現存していたのであり、個々の詩において現れたり仕上げられたりしたものは、有機的なものではあっても、つねに断片に過ぎないものと見なされてよい。文書をつうじて私たちにもたらされた創作は、巧みに痕跡もなく沈降してしまい、民のもとにいまなお保存されている³⁶⁾。

ここからは、無教養な民衆を無垢な存在として美化するロマン主義の一面が見てとれる。このような見解に立てば、メルヒェンを伝えてきた個人の顔は「民」に吸収されて消えて夾雑物を洗い落とし、「民」の本来のメルヒェンへと修復する作業だった可能性を否定できなくなる。彼の改訂作業を家父長制や保守性から断罪する場合は、まずもってこのヴィルヘルムと「民」と「神話」の関係について検討せねばならない。しかしターターやボティックハイマー(ヤエリス)はそのような作業をおこなっていない。筆者自身による検討は別稿でおこなう予定があるため、ここでは「民」と「神話」の観念がヤーコプにも共有されていたことを確認するに留めておきたい。ヤーコプは『ドイツ神話学』(初版 1835 年)の序文で次のように述べた。

ありとあらゆる伝承の根底は神話である。つまり神々への信心であり、それは民という民に、陰影の違いは無際限であっても、根づいているのだ³⁷⁾。

それ以前にもヤーコプは、エッセイ「伝説と詩心および歴史との関係についての考察」(1808 年)において、ホメロスの叙事詩やニーベルング伝説で歴史と一体であった詩が、後年において分離して「民」のもとに沈降し保存されてきたという見解を述べている。

古い詩心は国民性の圏内から教養に無頓着な下層の民のなかへと逃げさってしまい、その内部で衰えることなく、維持され、増えてきたのだが、教養層はこれへの制限を増やし、避けがたい影響を与えている³⁸⁾。

ヴィルヘルムと同じ思考がここに現れている。教養層によって無垢で素朴な古い詩心が壊されていくのに抵抗すること——それがメルヒェンを収集するという仕事の動機になっていたことも容易に推測される。グリム兄弟自身が教養層に属しており、彼らによってメルヒェンが壊されていったと考えることもできるが、そのまえに先ほど指摘した、ヴィルヘルムの改訂が破壊と逆の修復を意図したものだった可能性を検討せねばならない。

グリム兄弟の「民」と「神話」の理論にジェンダー意識の欠落は明らかである。しかし、グリム兄弟に対する批判は、彼らのさまざまな著作を踏まえ、かつ時代の制約も十分に意識した上でなされなければならない。

3. グリム兄弟の学問的関心と時代の限界

グリム兄弟の学問的著作を詳しく検討すると、いかなるジェンダー研究の論点が発見されるだろうか。ターターは英語で「紡錘の側」(spindle side)や「糸巻き棒の側」(distaff side)という言葉が母方の家系を、「槍の側」(spear side)という言葉が父方の家系を意味することを指摘している³⁹⁾。しかし、彼女はヤーコプが『ドイツ法故事誌』で類似した内容に言及していることには気づいていない。ヤーコプはその箇所では、古いゲルマン法では、女性を指すときに「紡錘の者」(spindelmâge, spillmâge, kunkelmâge)という言葉が、逆に男性を指すときに「槍の者」(spermâge, gërmâge)や「剣の者」(swertmâge)という言葉が当てられたと述べている⁴⁰⁾。同じ書物の別の箇所では、彼は「紡錘」が伝統的に「女と主婦の象徴」であるとも述べている⁴¹⁾。

それでは、ヤーコプがこのような事実を無批判のまま述べていることは、非難の対象とされるべきだろうか。少なくとも上記のような叙述からヤーコプを女性差別者と見なすのは短絡的である。同じ書物には、別の角度から女性に言及した箇所がある。彼は当時の「すべてのドイツ系の民」——ゲルマン系諸民族を指す——において女性が法関係の仕事から「閉め出されている」事実を指摘しつつ、ゲルマン神話においては逆に女神のノルネたちこそが法の主権者であることに注意を促す。「裁判官のようにノルネは彼女たちの席に座り」、彼女たちこそが「本来は人間の運命について判決を下し、結審する」⁴²⁾存在であった。ヤーコプは当時の女性を取り巻く現実を疑問視せずに受けとめているが、神話世界の女性の権利の大きさも彼にとって魅力的な問題なのである。つまり彼の関心は、現実社会の実態を理解することや改善に向けた活動をおこなうことではなく、神話と古代世界を現代人のために掘り起こすことに置かれていたのだ。

この点で、ヤーコプとヴィルヘルムの方向性は一致している。ヤーコプは『ドイツ神話学』でノルネについてのまとまった叙述を始める際、“norn (parca)”と表記し、ノルネと古代ローマの女神パルカ(古代ギリシャのモイラに対応)を同一視している⁴³⁾。彼はさらに、メルヒェンのなかの諸形象(たとえば「茨姫」の仙女たち)もその系譜を引いていると主張している⁴⁴⁾。他方でヴィルヘルムは「メルヒェンの本質について」で、ノルネとパルカのみならず、ヴァルキュリア、メルヒェンに登場する3人の糸紡ぎ女、さらには「メルヒェンのなかの黄金を紡ぐ姫たち」を同一視している⁴⁵⁾。古ノルド語の『エッダの歌』に収録された「フンディング殺しのヘルギ第1の歌」ではノルネたちが運命の糸を紡ぎ、黄金の糸を月の広間に結ぶが、ヤーコプとヴィルヘルムはそれぞれの著作でこれについて揃って言及している⁴⁶⁾。つまり、兄弟はともに、ゲルマン神話において女性——人間を超えた存在ではあるが——が運命と法を司っている事実の魅力を感じていたと思われる。『メルヒェン集』を「家父長的」で「保守的」と攻撃する際には、このような問題も合わせて論じるべきであろう。

時代の制約という問題は、誰にでもかかわってくる。冒頭で述べたように、近年はジェンダー研究の要素をもったグリム研究においてもLGBTIQの問題が注目を浴びている。潜在的なLGBTIQの割合——無数の異なるデータが存在するが、3%であれ5%であれ10%であれ⁴⁷⁾——を真剣に受けとめれば、メルヒェンを口承や書承によって伝えてきた男女の一部も、LGBTIQの人々だったはずである。メルヒェンで描かれる王子と少女の恋物語にも、男同士や女同士の恋を直接に表現できない状況下に置かれた人々の、一種の代償という要素が紛れ込んでいるかもしれ

ない。もしそうした観点に立って、クィア・スタディーズの研究者が、これまでのジェンダー研究の多くがフェミニズムの立場から、全人類の約5割にあたる女性の数を支えとして、圧倒的少数派である LGBTIQ の存在を不当に無視してきたと主張するならば、それは妥当な批判になっているだろうか。そのような批判は、LGBTIQ の存在が可視化されずクィア・スタディーズも存在しなかった時代の制約を無視して、現在の有利な立場から一面的な攻撃を加えた不当なものではないだろうか。批判は、時代と地域の制約を無視しておこなわれるべきではない。

おわりに

かつてインゲボルク・ヴェーバー＝ケラーマンは、グリム兄弟の仕事の神話的思考が後世の学問に多大な悪影響をもたらしたことを厳しく批判した。それは、ヤーコプ・グリムの『ドイツ神話学』からその教え子ヴィルヘルム・マンハルトの『森と畑の祭儀』（1875／77年）へ、そして英国のジェイムズ・ジョージ・フレイザーの『金枝篇』（初版1890年）に受け継がれた「民」の美化——神話世界の習俗が農村の無教養な人々のあいだで保持されてきたと見なす空想的議論——に対する痛烈な批判だった（学位請求論文とドイツ民俗学の概説書を参照）⁴⁸⁾。彼女は、ドイツと他の欧州諸国で展開された学問史に関する適正な理解に立って、グリム兄弟のメルヒェンが「ゲルマンの」あるいは「原初のドイツの」神話との関連づけにおいてではなく「19世紀の社会史」との関係において理解されるべきだと力説した（インゼル版『メルヒェン集』序文を参照）⁴⁹⁾。

時代は移り、現在のグリム研究ではヴェーバー＝ケラーマンが強調した「19世紀の社会史」はしばしば参照されても、学問史とグリム兄弟の学者としての仕事の全体像への正しい理解がないままに、表面的な印象と推測にもとづいて『メルヒェン集』を非難する論者が多い。ターターやボティックハイマーを取り上げたが、さらに深刻なのは彼女たちの受け売りによる論文の多さである。グリム兄弟の改変を彼らの人格の問題として位置づけ、そのジェンダー意識のなさを攻撃するのではなく、彼らが生きた19世紀の欧州の価値観を包括的に捉えたうえで、グリム兄弟たちが担っていた学問のあり方も含めた妥当性の高いジェンダー研究がなされるべきであろう⁵⁰⁾。

注

- 1) 『子供と家庭のメルヒェン集』（*Kinder-und Hausmärchen*, いわゆる「グリム童話集」）を本稿では『メルヒェン集』と略記する。
- 2) Joosen, Vanessa, *Critical and Creative Perspectives on Fairy Tales. An Intertextual Dialogue Between Fairy-Tale Scholarship and Postmodern Retellings*. Detroit, MI: Wayne State University Press, 2011, pp. 1-8.
- 3) *ibid.*, pp. 9-48.
- 4) 「レズビアン」、「ゲイ」、「バイセクシュアル」、「トランスジェンダー」、「トランスジェンダー」、「インターセックス」、「(ジェンダー) クィア」（またはクエスチョンズ）の略語。現在の日本では「LGBT」という用語が徐々に浸透しつつあるが、男女両性の身体的特徴をもつ人々

や性自認を留保する人々をも含めるために従来の「LGBT」を拡張したさまざまな用語も、欧米から新たに提起されてきている。そのうち「LGBTIQ」は特に包括性の高いものであるため、本稿ではこれを採用する。

- 5) 代表的なものとして *Transgressive Tales. Queering the Grimms*, ed. by Kay Turner and Pauline Greenhill. Detroit: Wayne State University Press, 2012 を参照。
- 6) 「茨姫」を例とした筆者自身の研究について「グリム兄弟の「棘荊姫」(KHM50)の版異同本文改訂と『自注』改訂のねじれた連関」説話・伝承学会編『説話・伝承学』、22号、2014、187-205頁を参照。
- 7) この著者の姓は日本では「タートル」と表記されるが、それは最初の翻訳書が出版された際に次のように判断されたからであった——「彼女の名前はターターあるいはタータと表記するのが実際の発音にもっとも近いと思われるが、字面があまりに悪いので、発音よりむしろ綴りに従って、タートルと表記することにした」(マリア・タートル著、鈴木晶他訳『グリム童話 その隠されたメッセージ』、新曜社、1990、「訳者あとがき」、350頁)。本稿では原音に近い音を優先して「ターター」の表記を採用する。
- 8) それぞれの代表作 Tatar, Maria, *The Hard Facts of the Grimms' Fairy Tales*. Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1987、Bottigheimer, Ruth B., *Grimms' Bad Girls & Bold Boys. The Moral & Social Vision of the Tales*. New Haven: Yale University Press, 1987 に依拠する。
- 9) 注5の文献とルース・ボティックハイマー著、鈴木晶他訳、『グリム童話の悪い少女と勇敢な少年』、紀伊國屋書店、1990。
- 10) Tatar 1987, p. 19.
- 11) Ibid., p. 24.
- 12) 「説話の多様な登場人物が、みずからの行動をとおしてその性分を明らかにさせてもらえる(それが、そのメルヒェンの品質を証明するのだが) ことがないのであって、ヴィルヘルム・グリムは説話の登場者たちを独自に裁いて判決を下さねばならないと感じ、読者が主人公たちに抱く見解をも粹に嵌めてしまった。私たちは聡明な君主、いたわりのある主人公、苦難の道をゆく美女、傲慢な姫君に無際限に出くわすが、それらは民間伝承のプロットの定型ではあるものの、性別や階級や個性についてのヴィルヘルム・グリムの先入観も大いに関係している」(Ibid., p. 30)。『メルヒェン集』では母親像についての固定観念がしばしば議論になるが、実母が中心的な役割を果たしていない理由の一端は、ターターによると、「ヴィルヘルム・グリムが検閲官として機能し、それらの説話の化け物めいた非自然的な人食いや魔物を、継母や、料理人や、魔女や、義母に変えてしまおうとする誘惑にほとんど抵抗できなかった」からである (Ibid., p. 142)。
- 13) Bottigheimer 1987, p. 17.
- 14) Ibid., p. 122.
- 15) Tatar 1987, p. 119; Bottigheimer 1987, pp. 118-119.
- 16) Bottigheimer 1987, p. xiii.
- 17) Rölleke, Heinz: *Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung*. 4., durchgesehene Aufl. Stuttgart: Reclam 2012, S. 82-83.

- 18) Zipes, Jack, *The Brothers Grimm. From Enchanted Forests to the Modern World*. New York: Routledge, 1988, pp. 11-12. Rölleke 2012 の最初の版は 1985 年に刊行された。
- 19) Basile, Giambattista, *Lo cunto de li cunti, testo napoletano con traduzione a fronte*. A cura di M. Rak. Milano: Garzanti, 1986, pp. 288-289. ギンシエルはフェーリクス・リープレヒトによるドイツ語訳を使用しているが、本稿では原文（当時のナポリ方言）と標準イタリア語訳を併記したこの対訳版を用いる。ただし筆者はナポリ方言をまったく理解できないため、日本語訳は標準イタリア語訳に依拠しており、いわば重訳である。
- 20) Ibid., pp. 45-46.
- 21) Ibid.
- 22) 1816 年に発表。Grimm, Jacob: *Kleinere Schriften*. Nach der Ausgabe von Gustav Hinrichs neu herausgegeben von Otfrid Ehrismann. 9 Bde. Hildesheim: Olms-Weidmann 1991-1992., Bd. 6 (1991), S. 226-232
- 23) バジールは白蛇が「金髪のをき毛がふさふさとしていて蠱惑的な眼差しをもつ美しい若者に姿を変えました。そして花嫁を掻き抱いて、その愛の果実を摘んだのでした」と語る (Basile 1986, pp. 342-343)。ヤーコブによる翻訳では「ごらんなさい、蛇はこの世界にいたなかでいちばん見栄えのよい若者になりました。彼の巻き毛は、頭で陽光のように輝きました」である (Grimm, J. 1991, S. 229)。
- 24) エリスはレレケの見解を借用しながら『メルヒェン集』の改訂をヤーコブとヴィルヘルムによる悪意ある共謀と見なしている。Ellis, John M., *One Fairy Story Too Many. The Brothers Grimm and Their Tales*. Chicago: University of Chicago Press, 1983, pp. 13-24.
- 25) これを明らかにした研究として Rölleke, Heinz: Die “stockhessischen” Märchen der “Alten Marie”. Das Ende eines Mythos um die frühesten KHM-Aufzeichnungen der Brüder Grimm. In: *Germanisch-Romanische Monatsschrift* 25 (1975), S. 74-86 を参照。
- 26) ヴィルヘルムは彼女を「大きな版」初版第 2 巻序文で紹介した (*Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergrößerter Nachdruck der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 nach dem Handexemplar des Brüder Grimm-Museums Kassel mit Ergänzungsheft (Transkriptionen und Kommentare)*). In Verbindung mit Ulrike Marquardt hrsg. von Heinz Rölleke. 2 Bde, Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht 1986, Bd. 2, S. IV-V)。グリム兄弟の弟エミール・ルートヴィヒが『メルヒェン集』のために書いた肖像と、グリム兄弟が「フィーマンおばさん」からメルヒェンを聞き取る（空想上の）場面を描いたルイス・カツツェンシュタインの絵も流布した (Gerstner Hermann: *Brüder Grimm*. Reinbek bei Hamburg: Rowohlt, S. 46-47 や Seitz, Gabriele: *Die Brüder Grimm. Leben-Werk-Zeit*. München: Winkler 1984, S. 61-62 に掲載)。
- 27) ターターはメルヒェンを収録した書物の図版において、女性だけでなく男性がメルヒェンを語る姿が自然に描かれていたことを示している (Tatar 1987, Ch. 5, Figure 8-14)。
- 28) レレケはグリム兄弟による当初の聞き取り記録（いわゆるエーレンベルク稿）を *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Urfassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812*. Hrsg. und erläutert von Heinz Rölleke. Cologne-Genève: Fondation Martin Bodmer 1975 として編纂し、提供者たちの経歴や解説とあわせてメルヒェンの一部を配列し

た豪華版の選集 *Es war einmal... Die wahren Märchen der Brüder Grimm und wer sie ihnen erzählte*. Hrsg. von Heinz Rölleke, Albert Schindehütte. Frankfurt am Main: Eichborn 2011 も刊行した。ハンス＝イェルク・ウターは『メルヒェン集』の概説書 Uther, Hans-Jörg: *Handbuch zu den "Kinder-und Hausmärchen" der Brüder Grimm. Entstehung-Wirkung-Interpretation*. 2., vollständig überarbeitete Aufl. Berlin: De Gruyter 2013 において、『メルヒェン集』に収められた作品すべての成立を解説している。

- 29) 「大きな版」初版の第1巻(1812年)は、カッセルのヴィルト家から作業が始められた。ドロテーア・カタリーナ・ヴィルトとその娘たち、つまりマルガレーテ＝マリアンネ(通称グレートヒェン)、リゼッテ、のちにヴィルヘルムの妻になったヘンリエッテ＝ドロテーア(通称ドルトヒェン)、マリー＝エリーザベト(通称ミーまたはミミ)である。ヴィルト家以上に豊富にメルヒェンを提供したのが、フランス系の官吏ハッセンプフルーク家の娘たち、つまり「老女」と誤解された前述のマリーと、ジャネット、そしてアマーリエである。第1巻に関してはランツブルク近郊アレンドルフの牧師の娘で、フランス語が得意なフリーデリケ・マンネルも重要である。第2巻(1815年)では前述したフランス系のドロテーア・フィーマンが最も重要な提供者となった。他には——以下、第1・第2巻の区別に拘らず記すと——ヴェストファーレンのベーケンドルフに住んでいたハクストハウゼン男爵家の娘たち、つまりマリアンネ(またはマリー＝アンネ)、ルドヴィーネ、アンナがいる。ロマン派の詩人アネット・フォン・ドロステ＝ヒュルスホフの姉イエニー、グリム兄弟の友人クレメンス・ブレンターノの妹マリア＝ルドヴィカ＝カタリナ、フランス人説教師ラミュ(ドイツ名ラムス)の娘たちユーリアとシャルロッテもメルヒェンを語った。
- 30) 特に重要なのは退役した竜騎兵曹長のフリードリヒ・クラウゼであった。上に述べたハクストハウゼン家の息子アウグストも姉妹と同じくメルヒェンを語った。のちにグリム兄弟の弟フェルディナントやヴィルヘルムの息子でヤーコプの甥ヘルマンも(後者はアンデルセンの創作童話だったことが後に判明したが)を語った。ただし画家のフィリップ・オットー・ルンゲ、フェルディナント・ジーベルト、カール・フリードリヒ・ミュンシャー、カール・ゲーデケのように多くの男性はメルヒェンを書いて郵送してきた。
- 31) レレケによると、初版の時点で書承にもとづいたメルヒェンは30%を超えていた(Rölleke 2012, S. 80)。
- 32) 「大きな版」初版では15世紀後半に成立したシュトラースブルク由来の手稿、ハンス・ザックスの笑話や詩、ヨハネス・パウリ『冗談とまじめ』(1552年)、ゲオルク・フィリップ・ハルスデルファー『痛ましい殺人物語の大舞台』(1663年)、ヨハネス・プレトリウスの『古い棒』(1667年)、グリンメルスハウゼン『初めての熊皮を着た男』(1670年)、ジャン・パウル『見えないロジ』(1793年)、ブレンターノとアヒム・フォン・アルニムによる歌謡集『少年の魔法の角笛』(1806-1808年)、グリム兄弟に先行するメルヒェン集(ムゼーウスやA.L.グリムのもの)、J.H.ユング＝シュティリングの自伝的著作などが使用された。第2版以後は、マルティン・ルター『詩編101番の解釈』(1535年)、ヴィクラム『荷馬車でのお話』(1555年)、ハンス・ヴィルヘルム・キルヒホフ『ヴェンド人の不満』(1563年)、マイアー・テディ(フリードリヒ・フーケの偽名)『女性文庫』(1823年)、ルートヴィヒ・

アウルバッハーの諸著作、ヨーハン・ヤーコプ・ニコラウス・ムソイスが『メクレンブルクの歴史と古代協会年鑑』（1840年）に発表した「メクレンブルクの民衆の説話」、モーリツ・ハウプト『古代ドイツ研究誌』（1842年）、アヒム・フォン・アルニムとブレンターノの妹ベッティナーの息子フリートムント・フォン・アルニムによる『山岳で集めた100の昔話』（1844年）、グリム兄弟の同僚で当時を代表するゲルマニストのひとりカール・ミュレンホフの『シュレスヴィヒ、ホルシュタイン、ラウエンブルクの伝説、メルヒェン、歌謡』（1845年）、そしてフィリップ・ホフマイスターが『ヘッセン史協会誌』に発表した記事などからメルヒェンが精選され、『メルヒェン集』に組み入れられた。

- 33) 女性から聞き取られたメルヒェンが、男性著者の書籍を用いて改稿された例についても考慮に入れると、この印象はなおさら強まるだろう。たとえば「狼と七匹の子山羊」(KHM 5)は、当初ハッセンプフルーク家の女性たちからもたらされたが、第5版でアウグスト・シュテーパーの『エルザス小民謡集』（1842年）を参考に改稿された。「千匹皮」(KHM 65)は、男性であるカール・ネーリッヒ『シリー』（1798年）と女性であるヴィルト家のドロテアの影響をともに受けてヴィルヘルムによって成立し、のちにはA. L. グリムがみずからのメルヒェン集に採用したのだが、ヴィルヘルムはその影響を逆輸入でこうむりながら改稿作業をおこなった。
- 34) 「長靴を履いた猫」(KHM 33a)を例にとると、このメルヒェンはハッセンプフルーク家の女性ジャンネットによってもたらされたが、彼女の語りの源泉はフランスの男性著者シャルル・ペローである（第2版以降、削除）。「茨姫」(KHM 50)は同家のマリーによって語られたが、やはりペローを源泉とし、かつ部分的にはフランスのオーノワ夫人に影響を受けており、マリーからの聞き取り原稿をヴィルヘルムはペローの版を参考にしながら改稿した（後者に関する筆者自身の研究として注6の論文がある）。
- 35) *Kinder-und Hausmärchen*. Gesammelt durch die Brüder Grimm. 3 Bde. Berlin: G. Reimer 1819 (Bd. 1 u. Bd. 2) / 1822 (Bd. 3), Bd. 1, S. XXVIII.
- 36) Ibid., S. XLIX.
- 37) *Deutsche Mythologie*. Nach der Ausgabe von Elard Hugo Meyer, neu herausgegeben von Helmut Birkhan, mit einem Vorwort von Helmut Birkhan. Hildesheim: Olms-Weidmann 2001–2003, Bd. 1 (2003), S. III.
- 38) Grimm, Jacob 1991–1992., Bd. 1 (1991), S. 400.
- 39) Tatar 1987, p. 114.
- 40) Grimm, Jacob: *Deutsche Rechtsalterthümer (1899)*. Mit einer Einleitung von Ruth Schmidt-Wiegand. 2 Bde. Hildesheim: Olms-Weidmann 1992, Bd. 1, S. 225.
- 41) Ibid., Bd. 1, S. 236.
- 42) Ibid., Bd. 2, S. 358.
- 43) Grimm, Jacob 2001–2003, Bd. 1 (2003), S. 335.
- 44) Ibid., S. 341–342.
- 45) Grimm, Wilhelm 1819, Bd. 1, S. XLI–XLII.
- 46) Ibid., XLI, Anm.; Grimm, Jacob 2001–2003, Bd. 1 (2003), S. 338.

- 47) 日本では、株式会社電通のダイバーシティ(多様性)課題対応専門組織「電通ダイバーシティ・ラボ」が2015年4月に全国で69,989名を対象に広範な調査をおこなった結果、「LGBTを含む性的少数者=セクシュアル・マイノリティ」に該当する人として算出された割合は7.6%であった。<www.dentsu.co.jp/news/release/2015/0423-004032.html>
- 48) Weber-Kellermann, Ingeborg: *Erntebrauch in der ländlichen Arbeitswelt des 19. Jahrhunderts. Auf Grund der Mannhardtbefragung in Deutschland von 1865*. Marburg: N. G. Elwert 1965; Weber-Kellermann, Ingeborg/Bimmer, Andreas C./ Becker, Siegfried: *Einführung in die Volkskunde. Europäische Ethnologie. Eine Wissenschaftsgeschichte*. Vollständig überarbeitete und aktualisierte Aufl. Stuttgart: Metzler 2003. 後者の邦訳として、ヴェーバー＝ケラーマン、インゲボルク／ビマー、アンドレアス・C／ベッカー、ジークフリート『ヨーロッパ・エスノロジーの形成 ドイツ民俗学史』河野真訳、文緝堂、2011年が出版されている。
- 49) *Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. Mit Zeichnungen von Otto Ubbelohde und einem Vorwort von Ingeborg Weber-Kellermann*. 3 Bde. Baden-Baden: Insel 1984, Bd. 1, S. 9-15
- 50) 本稿では、メルヒェンと「民」と「神話」のロマン主義的発想においてヤーコプとヴィヘルムが一致していた点に注目した。ただし両者の間で見解の不一致も多々あり、それらについての筆者の研究は別稿として一部刊行している。「グリム兄弟による「歌謡エッダ」(古ノルド語)のドイツ語訳(その1)——「青年シグルズの歌」を例として」『AZUR』京都府立大学ドイツ文学会編7号、2015、21-42ページとその続編「グリム兄弟による『歌謡エッダ』(古ノルド語)のドイツ語訳(その2・完結編)——「青年シグルズの歌」を例として」『研究報告2014/15』(私家版)2015、25-45ページを参照されたい。

付記：本稿は日本ジェンダー学会第18回大会(京都大学、2014年9月20日)での口頭発表を大幅に改稿したものである。この研究はJSPS科研費(課題番号26770121)の助成にもとづいている。